

モーツァルト

◆幻想曲 ハ短調 KV475

ピアノ・ソナタ 第14番 ハ短調 KV457

このソナタは、1784年10月14日に作曲され、翌1785年5月20日に作曲された同じハ短調の幻想曲KV475とともに、アルタリア社から出版されました。どちらも弟子のトラットナー夫人に献呈されています。

この幻想曲とソナタが書かれた1784年から1785年は、ウィーンでの予約演奏会が次々に成功し、いわばモーツァルトの絶頂期に当たっています。しかし、このピアノ・ソナタでは、祝祭的な華やかさは影を潜め、激しい情熱的な部分と透明な美しさが同居し、全体を通して緊張感に溢れています。幻想曲ハ短調を弾いておきますと、このソナタを作曲した2年後にプラハで初演されることになるオペラ《ドン・ジョヴァンニ》の世界が浮かびあがります。

ソナタKV457の第1楽章は、冒頭、ハ短調のアルペジオが上昇するテーマで始まります。夢見るような第2楽章は、テーマが繰り返されるたび、典雅な変奏が加わり、モーツァルトが得意とした即興演奏を彷彿とさせます。そして第3楽章、分断と摩擦と拮抗を重ねながら終局に進みます。

モーツァルト時代、ソナタの演奏前に前奏の役目として「幻想曲」が弾かれる習慣がありました。今日も「幻想曲」と「ソナタ」を続けて弾かせていただきます。

ベートーヴェン

◆ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 作品13《悲愴》

この有名な《悲愴》ソナタは、1798年から翌99年にかけて、ベートーヴェン20代の終わりに作曲されました。ベートーヴェンが残した32曲のピアノ・ソナタの中で、初期作品の頂点とも言えるソナタです。ベートーヴェンのソナタの愛称の大部分は、後世の人がつけたものですが、この《悲愴》—「グランド・ソナタ・パテティーク」というタイトルは、ベートーヴェン自身によって名づけられました。ベートーヴェンのこのソナタにかける、並々ならぬ意気込みと思い入れが感じられるような作品です。

ベートーヴェンはこのソナタを作曲する際、モーツァルトのハ短調K457のソナタから大いに影響を受けたと思われます。モーツァルトの音楽の中にある、自由に揺れ動く感情の動き、あるいは情熱的な激しさにとっても大きな魅力を見だし、それを自らのやり方で発展させようとした。

しかしモーツァルトの影響を受けながらも、この《悲愴》ソナタの中には至る所にベートーヴェンの独自性が現れています。第1楽章には、グラーヴェの導入部がついていますが、このグラーヴェは単に導入部だけではなく、展開部にもまた再現部にもアレグロの部分に対抗するかのよう現れ、この楽章を一層劇的なものにしてしています。またアレグロの第1主題は、急速に上に向かって突進し、すぐに落下する音型で、ベートーヴェン特有の激しさが凝縮されているように思えます。そして短い材料によって主題相互を関連づける「主題労作」と呼ばれるベートーヴェンの音楽の大きな特徴が、早くも完全に現れています。

◆アンダンテ・ファヴォリ ヘ長調 WoO.57

この曲は、もともとは、ピアノ・ソナタ《ワルトシュタイン》の第2楽章として作曲されました。ところが、この第2楽章を入れるとどうも長すぎる、と友人らに言われたこともあり、ベートーヴェンは考え直して、改めて“Introduzione”を作曲し、今の形として完成されました。そして、もとの第2楽章は、独立の作品《アンダンテ・ファヴォリ》として、1806年に出版されました。この曲を第2楽章として、ソナタ《ワルトシュタイン》を通して弾いてみると、冗長になってしまうことは否めません。

しかしソナタとの関連を離れ、独立のピアノ作品として見ると《アンダンテ・ファヴォリ》は、穏やかな優しさと憧れにあふれ、また底に秘めたエネルギーも併せ持った名曲だと思います。

◆ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調 作品53《ワルトシュタイン》

1803年から1804年にかけて作曲されました。中期のベートーヴェンの作風を代表する傑作です。その直前1802年、32歳のベートーヴェンはウィーン郊外のハイリゲンシュタットで静養し、2人の弟に宛て手紙を書きました。のちに「ハイリゲンシュタットの遺書」と呼ばれますが、そこには死に思い至るほどの苦悩を克服し、音楽家として生きることへの決意表明が綴られています。

翌1803年にはフランスのピアノ製作者エラルからピアノを贈呈されました。それまで使用していた楽器に比べ音域が5オクターブ半まで広がり、足で操作するペダル機能が備わったこのピアノは、ベートーヴェンに大きなインスピレーションを与えたことでしょう。

標題は、このソナタが後援者フェルディナンド・フォン・ワルトシュタイン伯爵に捧げられたことに由来しています。同時にこの名前は、ドイツ語でWald(森)とStein(石)の合成語であり、自然に対して親しい気持ちを抱き続けたベートーヴェンの一面が反映されているように思えます。雨雲、稲光、湖面、風など自然を感じる曲想が緻密に構築されていきます。

第2楽章 introductionは、まるで暗闇の中を探っていくような音楽です。探索と逡巡が続いた後、高らかにソの音が鳴らされ、最終楽章の光り輝く第3楽章ロンドの世界に入っていきます。ロンド主題はアルプスの民謡をもとにしており、山間で歌い、木霊が応えるかのような伸びやかなフレーズで、大きなデュナーミクの変化、ドラマティックで緊張感に満ちた副主題、神秘的な和音の連続など、ベートーヴェンの魅力、エネルギー、哲学を展開しながら終局へと突き進む、確信に満ちた音楽です。